The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『源氏物語論とその研究世界』
Author(s)	中川, 照将
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 105-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

伊井春樹著『源氏物語論とその研究世界』

中　川　照　将

『源氏物語』とは、如何なる形で流布・享受されながら、今、目の前に存在するのか。そして、現代に生きる我々は、その複雑な歴史的事実を有してある『源氏物語』に如何に向かいあうべきか。こうした決して避けて通ることのできない問題に対して、作品論・本文伝流史・享受史といった多彩な角度から『源氏』の本質を立体的に描き出しているのが、ここに紹介する伊井春樹氏の著書『源氏物語論とその研究世界』である。本書は、『源氏物語注釈史の研究』（一九八〇）・『源氏物語論考』（一九八一）以降に発表されたもののうちの五十五の論考を纏めたものであり、第一章「作品世界と人物像」、第二章「『源氏物語』の表現世界」、第三章「『源氏物語』の本文とその伝流」、第四章「『源氏物語』の注釈・享受と古典学」で構成される。これら全四章の内、紹介者が最も興味を惹かれ、かつ今後の『源氏』（本文）研究が目指すべき方向性が示されていると考えられるのが、第三章である。

第三章は、第一・二節、本文伝流史の概論的意味合いを持つ論考に始まり、第三・四・五節、大島本に施されるミセケチ・書き入れ等の検討をもとに、現在の青表紙本尊重の基盤『源氏物語大成』並びに底本大島本本文の問題点を浮かび上がらせた論考。第六節、『物語二百番歌合』詞書の考察から、『歌合』成立の問題、『歌合』作成時に用いられた定家所持本（別本）の性格を明らかにした論考。以下、耕雲本（第七・八）、陽明本（第九・十節）、中京大学本（第十一節）、保坂本（第十二節）等々を考察対象とした論考の全十五節からなる。この構成を概観するだけでも、第三章が目的としたところは明白であろう。それは、室町中期以降、主要な伝本として尊重され続けてきた青表紙本の正当な位置づけであり、かつては主要な伝本として流布し享受されていながら、時代が下るとともに淘汰されていった非青表紙本の正当な位置づけである。

そもそも青表紙本が現在まであり続けることができたのは、必ずしもそれが、他本に比べ『源氏』原本に近かったからではない。原本に近い、もしくは表現が優れていると「判断」されたからに他ならなかった。定家の「判断」のもとに作成された青表紙本。室町中期以降、藤原定家という権威のもと、善本として「判断」され、広く流布することとなった青表紙本。本書の重要な柱ともいうべき第四章に詳述される『源氏』注釈史・享受史は、まさに「青表紙本／非青表紙本」が、優れた『源氏』（本文）を模索し続けた人々の「判断」によって「尊重／排斥」されていく過程を示すものとしてもある。

青表紙本が流布本としての地位を確立したという歴史的事実ではなく、青表紙本と同様に、淘汰されていった他の伝本もまた存在していたという歴史的事実を謙虚に受け止めるべきである。本文の優劣等のすべての問題は「まず、一つの本文の読みを深め、それぞれの世界を知った上で判断していくしか方途はないであろう」（四二九頁）。これこそが、第三章、ひいては本書全体に貫かれた著者の『源氏』に対する姿勢であり、主張である。

（二〇〇二年十一月　風間書房　一一四〇頁　二八、〇〇〇円）

――本学大学院研究生――